

1歳児クラスにおける「人」「物」「空間」と「遊び」との結びつき

—遊びのきっかけに着目して—

The Relation between Persons, Things, Spaces and Play in 1-Year Old Class :
Focusing on Cues for Play

齊藤 多江子¹⁾・増田 まゆみ²⁾

SAITO, Taeko・MASUDA, Mayumi

Abstract

In this study, we considered the relation between persons, things, spaces and play in 1-year old class, through showing the reality of play. We are focusing on cues of play to consider the relation persons, things, spaces and play. Persons, things and spaces were related to each other, it was possible to show related to play. It was also suggested that importance of childcare workers who can consider spaces and things, while catching interest of child.

キーワード：1歳児クラス、人的環境、物的環境 空間的環境、遊び

I. 研究の目的

2000年代、OECDはじめ諸外国において、乳幼児期の保育の質に関心が高まり、質の高い乳幼児期の教育の必要性が認識されるようになった¹⁾²⁾。我が国においても、保育の質に関して、1990年代末より保育環境や保育者の援助等に注目した研究³⁾⁴⁾、尺度を用いて「質」を検討する研究⁵⁾⁶⁾等が行なわれている。特に、保育環境に関しては、日本の保育・幼児教育は「環境を通して行う教育」を特徴としていることから、保育環境の質の向上は、日々の保育の質の向上につながる重要な要因となると考えられる⁷⁾。

保育環境に関する研究は、保育室の空間構成⁸⁾⁹⁾や園庭の環境¹⁰⁾¹¹⁾等、さまざまな観点から環境のあり方について検討がなされている。しかしながら、従来、環境を構成する際の視点が実践知に留まり、「環境構成」の概念の共有化を図ることが難しかった¹²⁾。

また、保育環境について乳幼児期の保育・教育の基本を示す保育所保育指針には「人、物、場などの環境が相互に関連し合い、……」¹³⁾、また幼稚園教育要領には「教師は、幼児と人やもののかかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない」¹⁴⁾と明記されている。したがって、「人的」「物的」「空間的」

環境は、それぞれが子どもの生活や遊びを支えている重要な要因であり、単独ではなく、影響しあうことで成り立っていると考えられる。

小川(2000)は、遊びは場所・モノ・幼児の群や保育者の動きの特性と深く結び付いている場合が多いとし、遊びの現象を人・モノ・空間の関係のシステムとしてとらえることを示している¹⁵⁾。そして、吉村(2014)が「玩具をどのように与えるか、は、子どもをどう見るかにつながり、どのように育てたいか、という子ども像につながってくる」¹⁶⁾と述べているように、保育者の子ども観や保育観、意図や配慮が、このような「人」「物」「空間」の結びつきにも反映されていると考えられる。

このようなことから、「人的」「物的」「空間的」環境という複数の要因から、子どもの生活や遊びを支え、保育環境の質を向上するための方法について検討することが重要であると考えられる。しかし、これまで「人」「物」「空間」の関連に目を向け、保育環境の質を検討することはあまりなされてこなかった。また、具体的な保育実践の中で、保育環境の質が子どもの遊びや生活をどのように支えているのかについて調査した研究も進んでいるとはいえない¹⁷⁾。特に、3歳未満児においては、理論的枠組みや原則に基づいて環境構成を行うために必要となる視点や要素について検討されてこなかった。

そこで、本研究は、1歳児クラスに焦点をあて、保育室内での遊びにおいて、「人的」「物的」「空間的」環境が遊びとどのように結びついているのかを具体的に捉え

1) こども教育宝仙大学 准教授

2) 東京家政大学 教授

ることが目的である。「人」、「物」、「空間」と「遊び」の結びつきを検討するために、結びつくきっかけとなる「遊びのきっかけ(発生)」に着目する。そして、保育環境が遊びとどのように結びついているのかを明らかにすることを通して、保育環境の質を考えるうえでの視点について検討する。

II. 研究方法

1. フィールドおよび観察対象

C認可保育園、観察対象クラスは、1歳児クラス20名(観察開始4月時:1歳4ヵ月~2歳)であり、担任保育者は常勤2名(クラス主任含む)、常勤的非常勤2名、短時間非常勤3名がローテーションを組み、保育にあたっている。

C保育園の1歳児クラスの保育室は、子どもの背の高さほどのおもちゃ棚や長椅子を利用して空間を仕切られている。

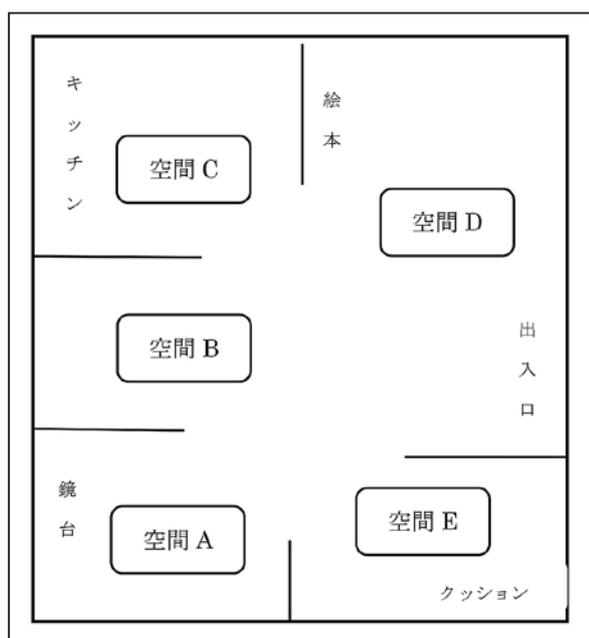


図1 保育室の仕切り方

2. 観察期間・場面

月1回程度(2013年4月~2014年3月)、子どもの登園が落ち着く午前9時30分頃から昼食までの約2時間、ビデオ録画と共に、フィールドメモをとるという形での参加観察を行った。参加観察ではあるが、子どもから働きかけてきた時も相槌を打つ程度とし、ビデオ撮影に徹するようにした。1歳児クラスの保育室内でのビデオ録画は、部屋全体が画面に入るように配慮して撮影を行った。

3. 分析方法

1) 分析対象

園庭での遊びから保育室に戻り、昼食までの保育室内で思い思いに遊ぶ場面を分析対象とした。

また、本研究における分析対象時期は、保育室内の空間の仕切り方に大きな変化がない4月から9月までとした。しかし、6月は途中で雨が降ってきたため通常より早く室内に戻ったこともあり、保育者の提案する遊びを中心として遊びが展開したため分析対象から除外した。

2) 分析方法

保育室内において発生した遊び場面を、「遊びのきっかけ(発生)」によって、以下の3つの大カテゴリー、4つの小カテゴリーに分類することができた。

- ①子どもの「物」への興味
 - a 一人で遊ぶ
 - b 仲間も同じ物に興味をもつ
- ②子どもの「遊び空間」への興味
- ③保育者による提案
 - a 物の提案
 - b 遊び方の提案・提示

III. 結果

保育室内において発生した遊び場面をすべて抽出し、それぞれの遊び場面における「遊びのきっかけ」によって、3つのカテゴリーに分類し、その概略を分かりやすく示すためにまとめたものが表1である。

① 子どもの「物」への興味

子ども自身が棚等に置いてある物に興味をもち、その物で遊び始める場面を、「子どもの『物』への興味」に分類した。このような、子どもの物への興味から発生した遊び場面は、24事例中10事例あり、そのうち「a一人で遊ぶ」(10事例中3事例)もあるが、仲間が持っている物、使っている物に興味をもち、他の子どもも同じような物で遊び始める場面もあった(b:10事例中7事例)。また、他の子どもも同じように遊び始める場面7事例すべてにおいて、保育者は、子どもたちの遊んでいる姿を近くで見守ったり、子どもからの働きかけに応じていた(表1)。

② 子どもの「遊び空間」への興味

子どもが物だけでなく、遊び空間も含めた遊び内容に興味をもち、遊び始めたと考えられる場面を「子どもの『遊び空間』への興味」に分類した。このような場面は6事例あり、すべてが棚を利用して仕切られた空間にミニキッチンと座卓があり、棚にはままごとで使用できる様々な物が置いてある空間を利用して展開する「ままごと遊

び」であった(表1)。

③ 保育者による提案

「保育者による提案」に分類された場面は、8事例あった。そのうち、保育者が子どもに物を提案し、その提案に子どもが興味をもち、保育者と一緒に、または子ども自身が遊び始める場面を、「a物の提案」に分類した。このような場面は2事例あり、2事例とも棚に常設していない積み木を、保育者が子どもの状況を見て、別の場所から出して来る場面であった(表1)。

また、子どもがすでに持っている物の遊び方や使い方を保育者が提案したり、子ども自身が差し出した物に対して保育者が遊び方を示し、それらの提案を子どもが受け入れる場面を、「b遊び方の提案・提示」に分類した。このような場面は6事例あり、すべての事例で一人の子どもが遊び始めた姿を見て、他の子どもも同じように遊び始めている場面であった(表1)。

IV. 事例検討

場面を「遊びのきっかけ」によって分類した結果、前後の文脈と展開が明瞭な事例を取りあげ、考察を行なう。なお、子どもの表記はA～Oとし、異なる事例であっても、表記が同じであれば同じ子どもを示している。

① 子どもの「物」への興味

a 一人で遊ぶ

事例1 「自分なりに過ごしたい」 【表1:1】

Aは、ままごとコーナーからフライパンと野菜を左右の手に取り、大型クッションが置いてある場所にやってきて、クッションに寝転ぶ。しばらく寝転んで過ごしていたが、起き上がると、すぐ側にある棚からぬいぐるみを取り出し、今度はそれを持って、クッションで過ごす。その後、他の場所に出かけるがすぐに戻ってきて、クッションの上に「立ったまま上がっては降りる」行動を繰り返す。クッションで過ごしている時の顔は、にこにこした嬉しそうな表情をしている。保育者は、一人で過ごしている姿が気になったのか、仲間が遊んでいる場所に誘ってみるが、ここで過ごしたいと身体で訴える。保育者は無理強いせず、少し離れた場所からしばらく見守る。

Aは、持つ物を変えてクッションに寝転んだり、クッションの上に「立つ・降りる」行動を繰り返し、終始嬉

しそうな表情をしていることから自分なりの楽しみ方に満足して過ごしていると推察される。Aが寝転んでいた場所は、棚と壁で仕切られ、そこに大型クッションが置かれている空間であった。限られた狭い空間にクッションがあり、Aにとってくつろげる場所になっていたと考えられる。また、寝転ぶだけでなく、物を持って寝転んでいる。興味のある物やお気に入りの物を持って過ごすことは、より安心して過ごすことにつながると推察される。このようなことから、Aはそこで自分なりの楽しみ方や過ごし方ができたのではないかと考えられる。子どもが持っていたい物や、個別のニーズを許容できる空間があることは、その子なりの遊び方や過ごし方を保障できることにつながると考えられる。

① 子どもの「物」への興味

b 仲間も同じ物に興味をもつ

事例2 「仲間と一緒に」が楽しい 【表1:6】

座っている保育者のもとに、Bが布製の人形を3体、棚から取り出し、手に抱えて持ってくる。保育者が、床を指さし、人形を寝かせるように促す。Bは、保育者と一緒に人形を丁寧に寝かせる。それを近くで見ていたC、離れた場所にある棚から掛け布団一枚を持ってくる。Cは掛け布団を寝ている人形の上に掛けるが、一枚では足りないことに気が付いたのか、掛け布団を再度取りに行く。保育者がトントンと人形をやさしく叩くと、BとCも真似をしてトントン叩き、一緒に寝かせつける。その様子を見て、D、E、F、Gが次第に集まってきて、人形を囲んで座り、保育者や仲間と一緒に人形をトントン叩き、寝かせつける。

この事例では、Bが棚から人形を見つけて、保育者に持ってきている。また、それを見たCが掛け布団を持ってくる。このことから、前にも同じような遊びを保育者や仲間と一緒に経験があった推察される。Bが持ってきた人形を保育者と一緒に寝かせ、仲間が掛け布団を持ってくるという一連の流れから、物が遊びを結びつけ、その結びつきに保育者や仲間の存在やかかわりが影響し合っていることが示唆される。

また、保育者と仲間が人形を寝かせつけている姿を見て、他の子どもたちも興味をもち、遊びに参加している。保育者は、トントンとやさしく人形を叩くと、子どもたちもそれを真似する。保育者の動きがモデルとなり、仲間の動きに誘発され、人形を寝かせつけるという共通の動きにつながったと考えられる。そして、保育者や仲間と同じ物を共有し、共に同じ動きをすることは、保育者

表1 遊びのきっかけと遊びの内容

大カテ	小カテ	No	遊び名	日時	空間	モノ・物的環境	遊びのきっかけ	保育者のかかわり	
①	一人遊ぶ	1	クッションに寝転んで	4月26日	E	フライパン・野菜ぬいぐるみ 大型クッション	棚からフライパンと野菜を取り出し、左右の手に持って、大型クッションに寝転ぶ。	少し離れた場所から見守る。	
		2	積み木遊び	7月19日	E	色付き積み木	棚に置いてある色々な形の積み木を出して、床で積み木を並べ始める。	積み木で遊んでいる姿をみて、隣に座って見守る。	
		3	シャベルカーを押す	7月19日	複数	中型シャベルカー	棚から中型のシャベルカーを出してきて、押してシャベルカーを動かす。	遊んでいる姿を見守る。	
	仲間も同じ物に興味をもつ	子どもの物への興味	4	花や食べ物等を貼る・入れる	7月19日	B	タペストリー	棚の裏面に貼ってあるタペストリーに子どもが興味を示し、触ってみる。	子どもがタペストリーで遊んでいる姿を傍で見守り、子どもとやりとりをする。
			5	おしゃべり遊び	7月19日	A	髪どめ鏡	小さな鏡の前に置いてある布製の留め飾りに関心を示し、飾りを触る。	触っている子どもの姿をみて、隣に座り、飾りを子どもの髪や手首に付ける。
			6	人形遊び	7月19日	D	人形 布団・枕	座っている保育者のもとに、子どもが3体の人形を抱えて持ってくる。	子どもが持ってきた人形と一緒に寝かせる。
			7	イス遊び	8月30日	D	一人用イス(段ボール製) パチ	子どもが一人用イスに座り、太鼓のように、パチでイスを叩き、音を出す。	叩くことを楽しんでいる姿を見て、イスを裏返して叩くことを提案する。
			8	絵本をみる	9月27日	D	絵本 子ども用長椅子	部屋に戻ってくると、なんとなく絵本棚の前にスペースに立ち寄り、子どもが棚から絵本を出してきて、読み始める。	子どもの傍に座り、働きかけてくる子どもに応答する。
			9	絵本をみる	9月27日	D	絵本 子ども用長椅子	一人の子どもが床で絵本を見ていると、隣に座っていた子どもも傍に置いてあった絵本を見始める。	2人に長椅子に座ってみるように促し、各々が見ている姿を見守る。
			10	クッション遊び	9月27日	D	クッション 長い座布団	子どもが絵本棚の前に置いてあったクッションと長い座布団を移動させる。	子どもの姿をみて、保育者も傍に座り、子どもの働きかけに応じたり、クッションの置き方を整え、過ごしやすいようにする。
②	子どもの遊び空間への興味	11	おままごと	4月26日	C	皿・コップ・スプーン等 ミニキッチン・座卓	一人の子どもが座卓でおままごとを始める。	子どもが遊び始めると、そばに座り、子どもの働きかけに応じ、遊びを共有する。	
		12	おままごと	5月31日	C	鍋・おたま・皿等 ミニキッチン・座卓	一人の子どもがミニキッチンの前に立つ。	子どもが座卓で遊び始めると、隣に座って、子どもの働きかけに応じ、遊びを共有する。	
		13	おままごと	7月19日	C	鍋・皿・ジュース ミニキッチン	一人の子どもがミニキッチンの前に立ち、鍋を出し、遊び始める。	遊んでいる姿を見て、そばで座って見守る。	
		14	おままごと	8月30日	C	鍋・皿・色水 ミニキッチン・座卓	一人の子どもが座卓の前に座り、おたまと皿でおままごとを始める。	子どもがおままごとコーナーに入ろうとする姿を追い、子どもの隣に座る。	
		15	おままごと	9月27日	C	鍋・野菜 ミニキッチン	ミニキッチンの前に立ち、鍋を出して、その上に野菜を乗せる。	子どもが座っている保育者に、野菜が乗った鍋を差し出すと、食べる真似をする。	
		16	おままごと	9月27日	C	皿・おたま・野菜 色水・ミニキッチン・座卓	子どもが鍋や野菜を出して遊び始める。	保育者は座卓の前に座り、子どもの動きを真似して、遊びを共有する。	
③	物の提案	17	積み木遊び	8月30日	B	輪っかの回りに積み木が付いている木製玩具	保育者が木製で輪っかの回りに積み木が付いている玩具を出してくると、3人の子どもたちが集まってくる	子どもたちが遊んでいる様子を見守り、一人ひとりが遊びを楽しめるように、仲間との距離を調整する。	
		18	積み木遊び	9月27日	B	小型の木製積み木	保育者が小型積み木が沢山入っている大きな箱を出してくると、子どもは何かが入っているのか分かっているようで、保育者の後を追って集まってくる。	子どもが遊びやすいように、棚を動かしスペースを広げる。子どもが遊んでいる傍で見守り、一人ひとりが遊びやすいように積み木を移動したり、子ども同士の間隔を調整する。	
	保育者による提案	遊び方の提案・提示	19	布遊び・ふれあい遊び	4月26日	A	オーガンジ布	保育者が座ると近づいてきた子どもに布をかける。	一人ひとりの子どもに布をかけたり、身体を触ったりする。
			20	ミニカーを動かす	4月26日	D	ミニカー	子どもが床に置いてあったミニカーを3つ拾い、保育者に差し出す。	差し出されたミニカーを連結し、走らせて見せる。
			21	絵本をみる	5月31日	D	絵本 クッション 子ども用長椅子	子どもが本棚から絵本を取り出したのを見て、膝の上に座っていた子どもと一緒にみることを提案する。	子どもが本棚から取り出した絵本を自分が読むことを提案する。
			22	掃除	7月19日	D	小モップ 小ほうき 小雑巾	小ほうきを棚から出してきて、左右に持ったまま、他の子どもが遊んでいる様子を見ている。	モップ、ほうき、雑巾を持っている子どもたちに使い方のモデルを示す。
23	バスごっこ	8月30日	D	一人用イス(段ボール製) 子ども用長イス(段ボール製)	一人用イスに、2人の子どもが各々座ると、3人の子どもがそのイスに座ろうとする。その姿を見て、保育者が壁側に置いてあった長イスを同じように遊べるように場所を移動する。	イスに座っている子どもの前に座り、「バスごっこ」の歌等を歌いながら、運転する真似をしたり、子どもの働きかけに応じる。			
24	イス遊び	8月30日	D	一人用イス(段ボール製)	子どもがイスに座ると、保育者はイスの後ろを前後に動かし、子どもが乗り物に乗ったような状況を作る。	子どもが座ったイスを前後に動かす。子どもを交代で座れるように促す。			

1歳児クラスにおける「人」「物」「空間」と「遊び」との結びつき
 —遊びのきっかけに着目して—

仲間の存在・相互作用	遊びの概要
	フライパンと野菜、次はぬいぐるみを持ち、クッションに寝転ぶ。その後、クッションの上に「立つ・降りる」行為を繰り返す。終始にこにこしながら、自分なりの楽しみ方をして過ごしていることが感じられる。
	色つきの色々な形の積み木を少しずつ棚から出し、床に並べたり、形を作って遊ぶ。
	保育室内の色々な場所を、シャベルカーを押して移動する。
仲間が貼る・剥がす、入れる・出す姿をみて、興味を示し、同じようにやろうとする。	棚の裏側に貼られた2つのタペストリーの前に4人の子どもが座り、各々が貼る、入れる等遊ぶ。(一つは野原のタペストリー、花等を貼れるようになっている。もう一つはライオンの口の中に食べ物等を入れられるようになっている。)
仲間が触っている姿をみて、他の子どもが隣に立ち、同じ物を触る。	保育者が手に取った留め飾りを、子どもの髪や腕につけると、子ども自身でも自分で付けようとする。
それを見ていた別の子どもが、布団やまくらを棚から持ってくる。	6人の子どもたちは、保育者と一緒に、運んできた人形、布団を使って、人形を寝かせつける。保育者がトントンと人形をやさしく叩くと、子どもたちはそれを真似して、一緒に寝かせつけを始める。
イスをパチで叩いている仲間を見て、別のイスに同じように座りパチでイスを叩き始める。	2人の子どもがイスに座って、イスをパチで叩き、音を出すことを楽しむ。
仲間が絵本を見始めると、他の子どもも棚から絵本を取り、各々で見始める。	3人の子どもが、長椅子に仲間のすぐ隣に腰かけて、各々で絵本を見る。その後、立ったまま、絵本開いて見ている子や、床で絵本を広げて見ている子もいる。その中には、二人で一つの絵本を一緒に見ている子どももいる。
保育者の傍で2人の子どもが絵本を見ているところに、他の子どもが少しずつ集まってくる。	保育者の傍で2人の子どもが絵本を見ていると、そこに少しずつ子どもが集まってきて、5人の子どもが長椅子に並んで腰をかけて、各々で絵本をみる。
仲間の動きをみて、同じようにクッション等を運び、各々が隣で座ったり、寝転ぶ。	クッションと長い座布団を敷き、その上に座ったり、寝転ぶ。隣に居る仲間とのやりとりを楽しむ。
仲間と保育者がおままごとをしている姿を見て、他の子どもも同じように遊び始める。	保育者の周りで6人の子どもが、座卓で食事を作ったり、作ったものを食べたり、保育者に働きかける等、各々でおままごとを楽しむ。
仲間がキッチンの前に立つと、2人の子どもが、座卓に向き合って座り遊び始める。すると、キッチンに立っていた子どもも、近づいてくる。	3人の子どもと保育者が座卓を囲んで遊んでいると、2人の子どもが後から参加してくる。保育者の周りで5人の子どもが、食事を作ったり、作ったものを食べたり、保育者に働きかける等、各々でおままごとを楽しむ。
仲間がキッチン立っている隣に並んで立ち、おたまを出してきて同じように遊ぶ。	2人はミニキッチンの前に並び立ち、鍋、皿、おたま等を出し、食事を作って遊ぶ。
仲間がおままごとコーナーに入ろうとする姿を、保育者と一緒に追いかける。	4人の子どもが保育者と座卓を囲んで座り、各々で食事を作る。作った食事を保育者に食べてもらおうと、保育者に差し出し、「食べてもらっては作る」ことを繰り返す。
仲間が野菜で遊んでいる姿をじっと見ているが、やりとりは見られない。	ミニキッチンの前に立ち、鍋に野菜を乗せて遊び始める。しばらく一人で遊んでいたが、鍋に野菜を乗せて保育者にそばにやってくる。保育者に鍋を差し出すと、保育者は食べる真似をする。
仲間と保育者が座卓を囲んでいると、他の子どもも同じように遊び始める。	7人の子どもと、保育者は座卓を囲み、各々で皿やおたま、野菜、色水等を出して、おままごとを楽しむ。
仲間が遊んでいると、他の子どもも同じように遊び始める。	輪っかの回りの付いた積み木を立てたり、倒して遊ぶ。一人ひとり各々の遊び方で遊んでいるように見える。仲間が遊んでいる姿を見て興味をもった子どもと一緒に参加するが、そのうち徐々に減っていき、途中からは3人の子どもがじっくり遊ぶ。
仲間が積み木で遊んでいる姿を見て、複数の子どもが興味をもち、寄ってくる。座る場所がないと思ったのか、遊ぶことを諦め別の場所に行く子どももいる。	5人の子どもが、各々で積み木を積んだり、並べることを楽しむ。保育者が仲介や調整をしながら、遊びが続く。その後、仲間が積んでいる積み木の上に、積み木を積むことを一緒に楽しむ姿が見られる。
保育者が仲間を布をかけている姿をみて、2人の子どもがやってくる。	布遊びの後、保育者は、子どもを床に寝かせて、頭から足をさする等、触れ合い遊びを始める。その後、徐々に6人の子どもがやってくる。触れ合い遊びに自ら参加する。
後から保育室に入ってきた子どもが、仲間が遊んでいる姿を見て、別のミニカーをもち、同じように走らせ始める。	保育者が走らせている様子を見て、子どもが走らせ始める。保育者は子どもに寄り添いながら、子どもの動きに合わせて言葉をかける。その後、仲間も同じように走らせ始め、最後には4人の子どもが、各々車同士をくっつけたり、走らせて遊ぶ。
保育者が仲間が絵本を読んでいる姿を見て、他の子どもも少しずつ集まってくる。	保育者が2人の子どもに絵本を読み始めると、それを見て他の子どもが徐々に集まってくる。途中、数人の出入りがあるが、仲間が選んだ絵本が読み終わると、別の子どもが絵本を選んできて読んでもらうという流れがしばらく続く。
モップやほうきを持っている姿をみて、棚に掃除道具を探しに行く。	5人の子どもが、各々、モップ、ほうき、雑巾を使って、棚の上や壁を掃いたり、拭く動きを楽しむ。保育者は、子どもの動きに合わせて、言葉をかけたり、真似をして、一緒に遊びを楽しむ。
一人用イスに座ろうとしたが、座れなかった子どもは、長イスに座り、運転手の真似をする等保育者とのやりとりを楽しむ	2人の子どもが各々一人用イスに座ったことをきっかけとして、保育者は一人用イスに座れなかった3人の子どもたちを長イスに座れるように場所を移動する。保育者は、イスに座った子どもたちの前に座り、歌を歌ったり、話をしながら、やりとりを楽しむ。
保育者がイスを動かしている姿を見て、保育者の膝の上に座る	保育者が動かしているイスに仲間が乗っている姿を見て、3人の子どもが集まってくる。保育者は順番に子どもを乗せるようにする。仲間が乗っている間は側で待っていたが、しばらくすると、待っている子どももイスと一緒に動かすようになる。

や仲間との結びつきや遊びを共有することにつながると思われる。

② 子どもの「遊び空間」への興味

事例3 「仲間と同じようにやりたい」 【表1:12】

Hがミニキッチンの前に立つと、その姿を見たGとIもミニキッチンがある「ままごと」コーナーにやってくる。Gは鍋を、Iはおたまを棚から取り出し、座卓に向かい合って座る。それを見ていた保育者は、2人の間に座り、棚からボールを出す。するとGは、保育者が出したボールに、鍋の中味を移す動きをする。保育者がその動きを受け、おたまでボールをかき混ぜると、Gがそのおたまを取り、同じようにかき混ぜる。その様子を察したのか、キッチンに立っていたHがやってくる。保育者が、棚から別の鍋とおたまを取り出すと、HはGと同じようにかき混ぜ始める。3人の子どもと保育者が座卓を囲んで遊んでいると、しばらくしてDとJもやってきて、同じように遊び始める。保育者の周りで5人の子どもが、各々食事を作り、保育者は子どもの働きかけに応じ、一緒に遊びを共有する。

Hがミニキッチンで遊び始めると、G、Iが同じ空間でままごとを始め、その後D、Jも一緒に座卓を囲んで遊び始める。このような子どもの動きから、仲間の存在や仲間が関心をもったことに影響をうけ、またそこに保育者の存在があったことも、子どもが同じ遊びに興味をもち、遊び始めることにつながったと推察される。このことは、「人とモノ、空間の結びつきである遊びの拠点に、人（幼児）と深い結びつきのある存在の保育者が参加することで、空間の結びつきを強化し、場の状況性をより濃いものにする」¹⁸⁾、という小川（2000）の指摘と同じ実態を示していると考えられる。

また、Gは保育者が出したボールに、自分が持っていた鍋の中味を移し、保育者がそのボールをおたまでかき混ぜると、今度はIがおたまで同じようにかき混ぜている。保育者が子どもの動きに、応じるような行動をしたことで、新たな遊びの展開につながったと考えられる。その後、Hが傍にやってくると、保育者は別の鍋とおたまを出してきている。これには、保育者がHの思いを予測し、同じ遊びができるようにという意図があったと思われる。

さらに、子ども達が遊んでいた場所は、棚で仕切られた空間にミニキッチンと座卓が置いてあった。子どもがままごとをすることを想定して設定された空間である。無藤（2013）は、幼児は場に依存し、その特徴を生かし

ながら遊ぶと指摘している¹⁹⁾。このような遊びを想定して設定された空間は、子ども自身が、物に対する興味だけでなく、遊びへのイメージをもちやすく、「遊び」に興味を持ちやすい空間になると考えられる。

③ 保育者による提案

a 物の提案

事例4 「仲間の動きを受けて」 【表1:18】

保育者は、小型積み木が沢山入っている大きな木箱を出してくる。子どもは何が入っているのか分かっているようで、保育者の後を追って集まってくる。保育者が積み木を箱から出すと、B、C、F、K、Lと一緒に積み木を出す。子どもたちは、積み木を積んだり、並べて、各々で遊び始める。保育者は、棚を動かして、遊べる空間自体を広げたり、子ども同士の間隔を調整する。しばらくして、Lが積んでいる積み木が自然と崩れる。それを見ていたCが積み木を持って近づいてきて、Lが積んでいる積み木の上に積み木を積む。それをLは受け入れる。仲間が積んだ上に積み木を積むことを繰り返し、積む積み木がなくなると、各々で積み木を運んでくる。積み木が高くなり自然に崩れてしまうと、また二人で積み木を積み始める。最初は一つの積み木の上に積み木を乗せていたのだが、途中から下に置く積み木の数や置き方を試行錯誤しながら、積み木を積む。

この事例は、保育者が積み木を提案し、それに子どもたちが興味を示し、遊び始める場面である。これは、1歳児が並べたり、積み上げたりすることが楽しめる大きさを配慮し、保育者が意図的に出したものであった。保育者が木箱を出してくると、子どもたちはすぐに興味を示していることから、前にも同じように保育者が積み木を出してくることがあったと考えられる。最初は、積み木を積む等、各々で使っていたが、Lが積んだ積み木が崩れたことをきっかけに、Cと一緒に積み始める。一緒に積んだ積み木が崩れると、また積み始めることを繰り返していることから、2人で一緒に積むことを楽しんでいることが分かる。相手が積んだ積み木の上に自分が積み木を積むということは、相手の動きを視覚で感じとり、その動きに自らの行動を合わせる必要がある。そこには、ただ仲間と同じ物を同時に使うということではなく、同じ物を扱って同じ動きを共有し、相手の動きに対応した動きが成立していると考えられる。物の特徴に見合った動き、相手の動きに対応した動きが成り立つことは、相手の存在が仲間の可能性につながる一つの要因になる²⁰⁾。

また、保育者は、空間を広げたり、子ども同士の間隔

を調整することで、一人ひとりの遊び空間を保障し、子どもが遊びやすいように配慮している。このような保育者の遊ぶ場の空間に対する配慮は、子どもの遊びの継続を保障することにもつながると思われる。

③ 保育者による

b 遊び方の提案・提示

事例5 「自分も同じような物を使いたい」【表1：22】

Mは小さなほうきを棚から出してきて、手に持ったまま棚に寄りかかり、他の子どもが遊んでいる様子を見ている。Hは小モップを、Oは小さなほうきと小雑巾を左右に持ち、なんとなく立っている。NとIは、同じ物に興味を持ったのか、掃除道具が置いてある棚までやってきて、棚の中をのぞき込む。その様子を見ていた保育者は、棚に残っていた小雑巾で棚を拭いて見せ、NとIに小雑巾を差し出す。

Nは、保育者と同じように、小雑巾を左右に動かし、棚の上を拭き始める。すると、すでにモップやほうきを持っていたH、Oもモップやほうきを左右、上下に動かし、掃き始める。その後、遊びが見つからないと思ったのか、床に寝転んでいたFや何となく立っていたKに、保育者が小雑巾を差し出す。すると、FとKも、小雑巾を左右に動かして床や棚を拭く。子どもたちは、各々が壁、床、棚の上と様々な場所で掃除道具を左右・上下に動かし、掃いたり、拭いたりする動きを楽しんでいるように見える。保育者は、子どもの動きに合わせて言葉をかけたり、子どもと同じように動き、一緒に遊びを楽しむ。

最初、M、H、Oは掃除道具を持っているのだが、それを使っているわけではなかった。保育者は、N、Iが同じ物に興味をもった際に、N、Iに使い方（遊び方）を示している。保育者が拭く動きを見せると、N、Iも同じように拭き始め、それがきっかけとなり、M、H、Oも持っていた道具を左右・上下に動かし、同じように使い始める。このことから、保育者がモデルとなり使い方（遊び方）を示すことが、子どもが遊び始めるきっかけとして重要であったことが示唆される。また、NとIは、わざわざ棚に探しにきていることから、仲間と同じ物を持つこととしていたと考えられる。これは、仲間が新たに物を持つことで、自分もその物に関心をもつことにつながったと考えられる。そして、子どもたちは各々で拭いたり、掃いていたのだが、掃く動き自体を楽しんでいるようにも感じられた。このことは、保育者や仲間と同じ物をもつだけでなく、同じ動きをすることで、保育者や仲間の存在を感じ、影響しあうことで、それが遊びの共有につ

ながっているのではないかと考えられる。

IV. 総合考察

本研究では、思い思いに遊ぶ場面を「遊びのきっかけ」により、①子どもの物へ興味、②子どもの遊び空間への興味、③保育者による提案の3つの大カテゴリーに分類し、検討を行なった。

「①子どもの物への興味」に分類されたものは24事例中10事例と最も多く、子どもが棚に置いてある物や壁に飾ってある物に関心を示し、それが遊びに結びつく事例であった。子どもの目に留まりやすい場所に物が置いてあることは、当然のことながら、一人ひとりの子どもが物に興味をもつためには重要なことであったと考えられる。また、子どもは物のある場所を知っていて、探していく姿も見られた（表1：No.6・8・10）。以前の記憶から「またやりたい」「また使いたい」と思った時に、置いてある物の場所を知っていることは重要なことであると思われる。そのためには、物の置場が決められていること、見つけやすいように置かれていることは、子どもの期待や予測を裏切らないことになる。

そして、遊びのきっかけには、遊び空間の重要性も示唆された。「②子どもの遊び空間への興味」に分類されたのは、「ままごと」コーナーでの遊びであり、分析対象である5日間すべてにおいて見られた（表1）。「ままごと」で使われる物だけでなく、「ままごと」を想定して設定された空間が常設されていることは、遊びへと結びつきやすいことが分かる。松本ら（2012）は、子どもに対し永続的に存在するモノが提示されることは、自らの意志とタイミングで「思わず」その場に参与していくことを個々の子どもに許容することを指摘している²¹⁾。遊びを想定して設定された物も含めた空間は、物だけよりもはるかに子どもが「思わず」その場に参与してくことにつながるのではないかと考えられる。

さらに、遊びのきっかけとして、仲間の存在も重要な要因となっていると考えられた。仲間と同じ物を共有して同じ動きをする（事例2）、仲間の使っている物を自分も使おうとする（事例3・5）、仲間と同じ物を同じように使う（事例3・5）、仲間と同じ物を使う動きを共有する（事例4）ことは、「仲間が使っている物」への関心から出発しており、仲間と同じ物や同じ場を共有すること自体が、仲間とのかかわりを結びつけていると考えられる²²⁾。例えば、「①子どもの物への興味」の「b仲間も一緒に」に分類された事例2では、子どもが関心をもった物を介して保育者や仲間とのかかわりが生まれ、さらに物を介して同じ動きを共にすることが遊びへと結びついていると考えられた。このような、物を介した仲間との

同じ動きには、寝かせつけるために「人形をトントン叩く」(事例2)、料理での「おたまでボールをかき混ぜる」(事例3)、掃除での「モップ等で掃く・拭く」(事例5) 動きが見られた。この動きは、生活に根差した行為でもある。「生活再現」のつもり遊び²³⁾は、保育者の行動の模倣からの遊びにつながりやすく、仲間と共有しやすいことも示唆される。

また、物を介した仲間との同じ動きには、保育者のかわりが重要であることが明らかになった。子どもが関心をもった物の使い方を保育者が見本を示す場面(事例3・5)では、保育者の動きに影響を受けた仲間の動きを模倣する子どもの姿がみられた。そして、それが子ども同士の中での遊びの共有につながっていると考えられた。砂上(2007)は、4歳児クラスの観察から、他の子どもと同じ物を使うことは、同じ動きをするなかに埋めこまれる形で、遊びのイメージや仲間意識の共有と結びついていることを指摘している²⁴⁾。1~2歳児はこの前の段階と考えられ、子ども同士の遊びの共有を生み出す保育者のかかわりがより重要になるのではないかと考えられる。

このように、1歳児クラスにおける遊びには、「物」、「空間」、「仲間」が遊びのきっかけに重要な要因となることが示された。また、仲間も同じように遊び始める事例すべてにおいて、保育者の存在があった(表1)。物や空間に興味をもつうえで、仲間の存在も重要であるが、そのきっかけや仲間とのかかわりをつなぐ保育者の存在の重要性も示唆される。保育者による物の提案、物の使い方の提示が、遊びのきっかけや新たな遊びを生み出すうえで重要であったと考えられる。

V. まとめ

本研究では、1歳児クラスにおける「遊びのきっかけ」として、子どもが物に興味をもち、それが遊びへと結びつく事例が多くみられた。物が1~2歳児の子どもたちの遊びのきっかけとして、とても重要な要素となっている。そして遊びへの結びつきには、遊びが展開される空間の重要性も示唆された。遊びを想定して設定された物も含めた空間や、一人ひとりの遊びを保障するための空間が、一人ひとりの異なる興味や遊びの継続に重要であると考えられる。

そこには、「仲間が使っている物」への関心から、仲間と同じ物や同じ場を共有することで、仲間とのかかわりにつながり、それが他の子どもの遊びに結びついていく実態もみられた。1~2歳児の仲間とのかかわりの発達の変化に関する研究において、物に対する直接的な関心をきっかけとして生じる交渉から、物への関心と相手への関心を統合させた交渉が優位になることが指摘されてい

る²⁵⁾²⁶⁾。このような1~2歳児における物が果たしている役割を踏まえたうえで保育環境を考えることは、1歳児クラスの環境構成において重要な視点になると考えられる。

また、「人的」環境は、仲間だけでなく保育者の存在の重要性も示唆された。物への興味が遊びへと結びつくためには、子どもが興味をもった物の使い方を保育者が提示したり、興味をもてるように保育者が物を提案することによって、また、保育者の行動を見ることによって、それらが遊びへと結びつき、時には新たな遊びへとつながる実態がみられた。

このようなことから、子ども一人ひとりの興味・関心を引き出し、遊びに結びつく「物」や「空間」があるかどうか、また「物」や「空間」が仲間とのかかわりを介する要素を果たしているかどうか、そして、1~2歳児に物が果たしている役割を意識して保育者が「物」や「空間」を提示・提案できるかどうか、1歳児クラスの保育環境、遊び環境の質を考えるうえで重要な視点になると考えられる。

VI. 今後の課題

保育者は、子どもの実態把握に基づく育ちへの期待によって、物や空間を設定し、子どもの思いや動きに応じたかかわりをしており、そこには保育の意図、環境構成や子どもへのかかわりへの配慮がある。今後は、保育者の意図や配慮が実践にどのように反映され、またそれがどのように子どもの遊ぶ姿に影響しているのか、計画段階も含めて検討することが必要である。

*本研究は、「平成25年~27年東京家政大学大学間連携等による共同研究『保育形態の多様性と質に関する研究』」での助成を受けて行われたものである。

謝辞

ご協力いただきましたC保育園の保育士の皆さま、子どもたちに心より感謝申し上げます。

引用文献

- (1) OECD (2006) Starting Strong II: Childhood Education and Care. Paris, OECD.
- (2) NICHD (2004) Early Child Care Research Network Childcare and Child Development. New York, The Guilford Press.
- (3) 土方弘子(1997) 三歳未満児の『保育の質』にかんする一考察. 大垣女子短期大学研究紀要. 38. 27-35
- (4) 増田まゆみ・小林紀子(2002) 多様化する保育ニーズと保

- 育の質を問う—長時間化する園生活の保育環境を中心に—小田原女子短期大学研究紀要. 32. 1-14
- (5) 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子 (1997) 保育者の評価に基づく保育の質尺度. 保育学研究. 35(2). 52-59
- (6) 西山修 (2006) 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成. 保育学研究. 44(2). 150-160
- (7) 秋田喜代美 (2015) 保育環境写真 (PEMQ) による保育者の環境への取り組みの変化. 日本保育学会第68回大会論文集.
- (8) 汐見稔幸・村上博文・松永静子・保坂佳一・志村洋子 (2012) 乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容. 保育学研究. 50(3). 64-74
- (9) 山田恵美 (2012) 幼児の活動の展開を支える保育環境: 絵本コーナー内の場と読み方. 保育学研究. 50(3). 263-275
- (10) 河邊貴子 (2006) 園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開: ウッドデッキの新設をめぐる. 保育学研究. 44(2). 235-245
- (11) 石倉卓子 (2012) 幼児の育ちに必要な園庭環境の検討—表現行為を可能にする自然材と道具の関係性—. 保育学研究. 50(3). 252-262
- (12) 高山静子 (2013) 保育における環境構成技術の構造的な把握による理論化の試み. 浜松学院大学研究論集. 9. 22-36
- (13) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説書. フレーベル館.
- (14) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- (15) 小川博久 (2000) 保育援助論. 生活ジャーナル
- (16) 吉村真理子 (2014) 0~2歳児の保育—育ちの意味を考え—. 吉村真理子の保育手帳②森上史朗・岸井慶子・赤坂榮・高嶋景子・渡邊英則・児嶋雅典・大豆生田啓友 (編) ミネルヴァ書房
- (17) 齋藤政子・宮脇龍介 (2014) 3歳未満児保育における「もの」「空間」に対する保育者の意識—保育者歴・年代との関連に着目して—. 日本家政学会誌. 65(6). 283-295
- (18) (15)前掲
- (19) 無藤隆 (2013) 幼児教育のデザイン: 保育の生態学. 東京大学出版会
- (20) 無藤隆 (1997) 協同するからだとは: 幼児の相互交渉の質的分析. 金子書房
- (21) 松本博雄・松井剛太・西宇宏美 (2012) 幼児期の協同的经验を支える保育環境に関する研究—モノの役割に焦点をあてて—. 保育学研究. 50(3). 53-63
- (22) 齊藤多江子 (2012) 1~2歳児の仲間と物とのかかわり—「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目して—. 保育学研究. 50(2). 4-14
- (23) 服部敬子 (2013) 子どもとつくる1歳児保育. 加藤茂美・神田英雄監修. ひとなる書房
- (24) 砂上史子 (2007) 幼稚園における幼児の仲間関係と物との結びつき—幼児が「他の子どもと同じ物を持つ」ことに焦点を当てて—. 質的心理学研究. 6. 6-24
- (25) 遠藤純代 (1995) 遊びと仲間関係 麻生武・内田伸子 (編) 講座・生涯発達心理学第2巻人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児期前期. 金子書房
- (26) (22)前掲